綻び

『山茶花』87-1号

老いの身は檻褸にあらず綻びと繕ひつくろひ生きたかりしか

齢かさね老いゆく日々を諾はむ古き浴衣を襁褓に替へて

月光にいよよ冴えたる石蕗の黄の極まりもなき径の明るさ

杖に依り五体にあらず六体の身はおのづから湧きくる気概

生と死のはざまに在りて何思ふ深夜の湯船に身を揺らしつつ

存命の秋　　『山茶花』　87-2号

灯を消して月の光に黙しゐる貪欲なまでの独りを思ふ

石蕗は衰へもなく黄を翳し師走の夕べ花明りせる

存らへて唯一保てる飲食よ明日の献立思ひ眠らな

生きの身の堪へがたきかなこの無残忘れし杖を腹這ひ捜す

紅葉を凌ぐものなき絢爛にほつれし眼(まなこ)しばし奪はる

裸木

『山茶花』 87-3号

さり気なく見送りし後の空虚（むなし）さもやがて潤ひコーヒーを飲む

赤き実を啄む鶇のいと愛しかかる温情も初春（はる）なればこそ

朝夕の飲食に足りし幸（さきはひ）を誰にか告げむ父母も在らずして

ひそかにも老いの願ひは果されずほとほと遠し死者との距離

確かなる明日なきわれの眩しさよ夕陽が晒す裸木の耀やき

血塚の由来

『あまぎ』46号

戦後なほその名とどめて売られゐる草刈る明日の軍手購ふ

われはまだ生きたかりしか播き終へし種子の袋に日付を記す

老いの身は檻棲にあらず綻びよ繕ひつくろゐ生きむとす

ひとり身の自由はむしろ不自由この葛藤も日々の生き甲斐

生きがたく死にがたくゐるこの拮抗いかにせむ野の曼珠沙華

くれなゐのいたく小さき木瓜の花その彩褪せずほのぼのと春

再びを訪ねてゆかな春なれば血塚の径の遠からずして

おほよそに血塚の由来語りつつ旅なる人と春の径ゆく